

2023 年度 G T セミナー 第 57 回保育環境セミナー 子ども主体編①

第 341 号 2023 年 9 月 11 日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガヤ 奥山卓矢

子ども主体編①

2023 年 9 月 4 日～7 日に「第 57 回保育環境セミナー」
(子ども主体編)を開催しました。

オフライン参加は約 150 名、オンライン参加は 60 施設を超える
お申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「子ども主体」に
ついて考え方をお示し頂きました。

本誌含め、4 回に分けてお送りする予定です。

【セミナー開催趣旨】

「見守る保育 藤森メソッド®」の提唱者 藤森平司先生は自身の実
践から今の保育形態を構築しました。その実践のポイントは「子ど
も同士」「異年齢」「子ども主体」「チーム保育」の 4 つです。

「見守る保育」という言葉はいろいろなところで一人歩きしてしま
い、勘違いされることがあります。

そこで提唱者である藤森先生の名前を使用することで、しっかりと
した理念とエビデンス、そして 4 つの重要ポイントを実践すること
で差別化を図りました。

また実践園は根底が同じであるため、様々な実践が生まれます。
その実践を互いに学び合うことができるのも、メソッド化した
もう一つの理由です。

GT は乳幼児施設同士が繋がることを目的とした組織です。

今後より繋がりが深くなることを願っています。

ギビングツリー代表 藤森平司 (新宿せいが子ども園 園長)

見守る保育 藤森メソッド
GT GivingTree
乳幼児施設同士が繋がることを目的とした組織です。

今、子どもに必要な
保育の「考え方」と
「態度」を学ぶ。

子ども同士の間わり
異年齢 日
7/10(日) 11(月) 12(日)

子ども主体 日
9/4(日) 5(月) 6(日)

チーム保育 日
11/13(日) 14(月) 15(日)

子ども同士や異年齢での関わりが
育ちの基盤となることを学びます。
そのための保育者としての発
想、考え方を学びたいセミナーです。

子ども主体の保育とは自分で「考え」
「実践」で学ぶという学びです。実践
を学ぶための考え方、そして具
体的な方法を学びたいセミナーです。

チームで保育することの意義や、そ
の考え方を学ぶことなど、子どもたち
の可能性が広がります。

保育環境セミナーは各園3日間の日程です

1日目 園見学 + 2日目 講演・実践発表 + 3日目 園見学

本セミナー(講師)
参加は2日間の専
門研修、園見学
をいかに効果的
に実施するか、
について学びます。

本セミナー
講師
本セミナー講師は2日間の専
門研修を受講します。

2日目はオンライン
講師によるオンライン
研修です。園見学
から学ぶことが
可能です。

園見学研修の本質
とは、園見学に
子どもたちと関わり、
園の見学による
研修の意義です。

園見学・子ども園見学、園見学の意義
について学びます。

オンライン参加も可能です
詳細は本誌へ

第57回保育環境セミナー 基調講演（子ども主体編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんおはようございます。会場が横に広いので、皆さんを見渡せないで、どこに向かって話したらいいかわからないが、スクリーンも身近なところで見てもらえたらと思うが、昨日パワポを作ったので見づらいところかもしれない。何で急に作ったかという、見守る保育をやっているとか、GT園とか、一緒に勉強をしているが、公立の園から、うちを見学をしたいとか、講演をしてほしいの依頼の多くは、見守る保育ではなくて、子ども主体について話してほしいという園が多いです。昨日も依頼のあった内容が、子ども主体の保育という言い方をされた。どうも、大学の先生が講義をする中で、せいがさんが子ども主体の保育をしているという話をするらしく、見たいと言われるが、私は保育の質が上がらない問題があると思う。その一つがずっと言われているけど、具体的に保育ではどうかということが言われない。その一つが子ども主体ということです。昔からずっとある。普通に考えて、誰だって子ども主体の保育をしていると思っているし、誰も大人主体でしているわけではないが、ただ、どうすればいいのかが分からない。そういう言葉が多いです。その一つが子ども主体です。二つ目が最近よく言われる非認知能力。その言葉は分かるが、そのためにはどんな保育をすればいいかが分からない。そういう意味では、講演を聞いてもそうだと思うけど、明日からどうしたらいいかに困ってしまうことが多い。最初に提案する「見守る保育」というのは、見て・守る。すぐ手を出さないで、待っている。具体的な保育方法が分かるので急に広がったと思う。しかし、そのあとの質問が、どこから手を出して、どこまで見ていいかわからないという質問がある。そういうように、現場の皆さんは日々子どもと相手をしていると、そういう場面が多いですね。ですから、いくら研修を受けても、わかりにくいことが一つあります。もう一つが今、国全体が見直そうとしているが、学問が文系と理系に分かれてしまう。科目によって分かれている。例えば、文系に行くと理科や数学はやらないで、国語や社会をやる。理系をやると逆に、国語や歴史はやらない。今の学問は複雑に絡み合っていますので、そういう分け方をするのをやめようと、大学で検討しています。例えば、高田馬場の近くには早稲田大学があるが、早稲田大学の中で有名なのは政経学部。政経学部というと、私からすると文系の一番の有名なところと思うが、経済というと数学をよく使う。文系だからと試験にないと、いざ、経済学部に入ると統計学・分析が必要。数年前から早稲田大学の政経学部では、数学の入学テストが入っています。保育の世界も、文系の代表的な学部なんです。しかし、理系的な発想はいらんかということがあつた。多くの大学教授で、保育の専門を出て、多くは文学か心理学か、哲学を出た人だと思つたが、発想が文系的発想。論理的というよりも、情緒的に考える。子ども主体という、子どもを中心に考えることという言い方をするが、子ども中心は、どこをどうすることがということがない、言い方をしてしまう。私は建築だったのでどちらかという理系だったが、最初違和感があつたが、最近はずっと違和感を感じることも多い。例えば、うちの園を見学して分かつたと思つたが、給食は一斉にそろってから頂きますをしています。来た順に食べていません。そうすると多くの人から、「冷めてしまわないか」と言われます。その時はとつさに思つたのは、「この人の冷めるのは、何度から何度になることだろう」と思つてしまいます。確かに、朝作つたお弁当はお昼に食べると冷めてしまいます。しかし、園でそんなはずはない。園での冷めるは、熱いものが温くなる程度だと思つた。私は子どもにとっては、温かい方が適温だと思つています。それをイメージで冷めるとまずいイメージがあり、そういう言い方をする。それから逆に、駅弁は冷めたものを食べることも多い。駅弁は冷めてもおいしいメニューにしている。駅弁は優れていて、冷めてもおいし

いもの、座席で食べるので、あまりにおいが充満しないもので考えられています。保育園で、この時間に作って、この時間に食べておいしいものを作ればいい話だと思う。もう少し論理的に考えた方がいいのではないかと思う。大学の先生の話の話を聞くとそうだと思うし、感動もしますが、聞き終わった後にどうしたらいいかわからない。かつて保育方法を提案している一番優れていると思っているのは、モンテッソーリやフレーベルは、もともとは理系。理論的にきちんと発達はどういうものか、どこが発達するかが構築されている。もう少し私は保育の世界を、そういう世界にしないといけないと思っています。何かというと、ここでAIが出てきたからです。AIのようなものだと、大学の先生が話すようなことは、AIが答えてしまいますね。答えないものは、具体的にどうするかは言わない。それを現場はしていかないといけないと思います。例えば、子ども主体とは何か。私はすぐにチャットGPTに聞いてしまう。子ども主体というと、子ども中心という風に出てしまうが、主体というとどうか。これが今日、保育の中で私がどう考えているかのヒントになる。チャットGPTに主体を聞くと、「主体とは、何か行動や何かの決定において、中心的な役割を果たすこと。主体は特定の行動、意思決定、活動、プロセスにおいて、他の要因を逝去し、決定する立場にある。」この通りで言ったら、大人が子どもを指導して、子どもが決定していかなければ、いくら子ども主体であると言っても、それは子ども主体ではないですね。例として、個人の主体性、組織の主体性、国家の主体性、プロジェクトの主体性、学習の主体性に分けているが、組織や国家プロジェクトは、直接関係ないので飛ばすが、個人の主体性は、個人が自己の行動や選択に対して責任を持つ。自分自身を指導する。人を指導するのではなく、自分自身を指導する。自分の意志や価値観に基づいて行動することを指す。自己決定能力や自己管理能力の一部を言います。そうすると保育の場面ではあると思うが今日の話の一つになります。学習の主体性と言ったときに、学習者が自分自身の学習プロセスを主体的に管理し、学習目標を設定し、学習活動を計画し、自己評価を行うことを指します。自己指導力や自己効力感の一部です。ここで自己効力感が出てきます。この間、全国大会でも自己肯定感と自己効力感が出てきましたが、自分でもできるだろうということです。これを保育に当てはめた時に順に具体的に話します。まず時間が足りるか分からないが、まず子ども主体の保育ということになります。

—子ども主体の保育—

子どもが自発的、意欲的に関われるような環境の構成と、そこにおける子どもの主体的な活動を大切にすることここに自発的と意欲的というのが分かれています。これは心情と意欲の部分です。自分からやりたい、好奇心があってしてみたいというのが、そういうような環境をつくる。その活動自身が自分で決定が出来る。何かをしなさいではなく、自分で決められるが、ただし責任を伴うことです。それが主体的です。ただ子どもの言う通りやることではないです。その環境の作り方は、学校施設の在り方について。文科省が幼稚園教育要領が改訂されると同時に、改訂されてきます。いわゆる学校施設、その中で幼稚園の園舎の部分です。

—学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議（平成30年3月）—

基本的な考え方

幼稚園では「環境を通して行う教育」を基本としていることから、幼稚園施設の整備にあたっては、屋内外を合わせた環境を整えることが重要である。また、地域の実情や幼稚園施設の実態などを踏まえて、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活を展開できる環境を確保すると同時に、…と書かれています。

基本の考え方に、幼児の主体的な活動を促す環境。私が提案するのはゾーンを作って、子どもが選んでやるが、がらんどろで、学校の教室のように、「さあ今日は折り紙をしましょう」と配って、先生の言うとおりに折っていくことは保育ではないです。主体的ではないです。主体的な活動をするための環境を用意することは、折り紙をやりたいと思ったときに、自分から出してやれる環境じゃなきゃ当然違ってしまいます。やりたいと思うための心情を作らないと、意欲を持たないと自分からやろうという自律性がないと、その環境を用意してもダメです。保育者がやることは、心情・意欲を作ること。それから、それを実現するためのやろうとする環境を作ることは、この文章からもわかる。保育園はどうも言われますが、相応しい生活が書かれているが、生活の中でも主体的に生活する。保育園でも、気を付けないといけないのがおむつを替え。うちの職員にも意見を言ったが、「おむつを替える時に、手が足りなくて時間がかかってしまいます」と言われました。その時に私は、おむつをさっさと替えて、遊びに行かせようと先生がするが、おむつを替えること自体も保育で、おむつを早く替えて、遊びに行けば保育なのではなくて、おむつを替えることも保育なので、早くやるとか、手際よくことはあまり意味がないですね、それよりも言葉かけをするとか、生活の自立を感じるように気持ちよさを感じさせるとか、もの横をさすってあげるとか、変えること自体に意味がある。早く遊びに行きたいからと言って、抱っこして連れていく。トイレまで自分で歩いていく、自分でハイハイしていくことも保育です。抱っこして、さっさと連れていけばいいというのは、家でお母さんが違う仕事に行かないといけないの時の考え方で、私たちはそれ自体が保育なので、もう少し生活の中にも、保育の学びがあることを知っていかないと、本当の主体的にはならないです。自分で行くことでも、子どもにとっては発達です。この前そういう話し合いをした時に昔からいた先生は、トイレに行く途中に階段を作ったり、坂を上ってトイレに行っていた。ただトイレに行くことが目的ではなく、行こうとすること自体に保育がある。行かない子には、ありのシールを貼って、追いかけてトイレに行くとか、生活の中で手を洗うことなどいっぱいあるが、ここ自体に保育があるという考え方をしていけないといけないですね。主体というのは、先生自体の考え方もあるんですね。施設整備指針の中にも、そういう重要な言葉がさりげなく入っているんですね。具体的に言うと、まず子どもが決定することがチャット GPT にありましたね。決定権がある。私が最初に考えた主体が、選択制の保育。子どもに選択をさせることは、子どもが決定を選ぶことできる。2つからかもしれないが自分で選べるがあります。

1. 選択制の保育

学習とは

常に選択という過程があり、どちらを選んで消したり、逆にさらに強化する過程が発達そのものである。そのことは、あくまでも自発的な行動でなければならないということ、自分の意志によって行われる活動こそが学習であるということ。これは生まれながらの刈り込みと脳の過形成ですね。人間の脳は白紙論ではありません。白紙で生まれて、絵を描いていくのではなくて、シナプスもニューロンも生れたと同時に1歳前までにつけて、上手に減らしていくことで、効率的な運動をしていくが、減らす時点で何を減らすか、残すかは自分の経験から選んでいきます。最初にシナプスの刈り込みがありますが、英語圏と日本語圏の6~8カ月児と10~12カ月児を対象に、音韻「R」「L」を区別する能力を確かめました。(クール2006年)その結果、日本語圏の赤ちゃんは、6~8カ月児の時点では、母語にない「R」と「L」を区別することができる一方で、10~12カ月児の時点では、これらの音韻の区別する能力が低下していました。他方、英語圏の赤ちゃんは、6~12カ月にかけて、「R」と「L」を区別する能力を上昇させました。これが裸形の認識なると逆ですね、アメリカの赤ちゃんはきちんとできなくなって日本の赤ちゃんは出来るようになる。小さいうちはどちらもできる、しかしどっちが必要かを経験の中で判断し、要らないものを削る。これが出来るな

いと情報効率が悪いのでLDになることが高いと言われていました。この観点から見守ると言い方をすると、子どものためと思ってやってあげることは、赤ちゃんはいらないと削ってしまうことがあるんですね。先回らないという言い方で見守ると言っていました。

「見守る」意味

この頃の刈り込みは、赤ちゃんが自ら必要なものを選択していきます。大人が先回って手を貸してしまうと、間違った選択をしかねません。この時期こそ、周りの大人は、子どもに対して応答的な、また、安心基地としての存在として、子どもを見守っていくことが必要なのです。

必要になるのが、駆け込める安心基地が必要になる。家におけるアタッチメントと、集団におけるアタッチメントは役割が違います。混同して使ってしまうが、実はアタッチメントを愛着を記すのは、家庭における母子に対するアタッチメント。集団や施設でのアタッチメントは安心基地。アタッチメントの中心行動は、家庭ではくっ付き行動。一緒にいたり、じゃれ合ったり、触れ合うことでアタッチメントを付けている。それに対して施設は、子どもは、子どもながらに一人でやったり、友達とやる。不安な時に誰のところへ駆け込んだらいいかを作る。昨日、午前中の見学に来た方には案内をしたが、スウェーデンの慣らし保育期間は、園に慣らすことではなくて、赤ちゃんがどの先生に駆け込めばいいかを見つける期間と言われていました。全職員に接しさせて、自分の気の合う人を見つける期間と言われていました。見つけたら安心して遊んだり、1人で過ごせる。それを一人に決める可能性があるし、複数に決める可能性がある。日本における担当制は、本来のアタッチメントではないというのは、役割分担だけで、年度初めにこの子はこの先生が担当しなさい、アタッチメントではなく役割分担です。一定の効果はあり、決めとけば抜けないなどあるが、気が合わないと不幸ですし、その先生の価値観で囲いかねないと、メリットより、デメリットが多いと言われていました。最初は自分でやることを選択しようとする。まだまだ失敗もあるので、先生たちは何かあったら、来てもいいよという立場にいる。担当してその人が食事をあげることではないです。家庭と混同している部分ですが、誰のところへ行くかを子どもが決めることも主体です。今の研究では、一人ではなく複数持つと言われていました。一人に決めてしまうと、いなかったら不安になることもあるし、子どもながらに先生の役割を知っています。私の孫で経験していることだが、普段、怖い先生とのところへは行かないが、怖い思いをした時は、その先生の所へ行くとかある。寂しい時など他の子のところへ行くこともある。それからぬいぐるみや、ライナスの毛布と言われる毛布をもって安心することもある。ライナスの毛布も、アタッチメントの一つと言われていました。家庭においては、お母さん、お父さん。施設においては子どもが自分で見つけていく。それも選択をしていくことです。私が提案する一つが一斉保育から、選択制保育をメソッドの中で提案をしているのは、子ども一人ひとりの発達を理解し、一人ひとりの特性に応じ、発達の課題に配慮する。チャット GPT に藤森の提案する保育をどうか？と聞くと、これが答えです。今までの保育は子どもに関係なく、計画をし、プログラムを組んでいた。それに対して藤森は、子どもをよく理解する。一人ひとりの特性、ニーズを観察して理解して、ニーズに沿って保育プログラムを立てていくという言い方をしています。それ自体が子ども主体ではある。ただし選択をするためには、色々なものがあります。

選択するために 一心内知性一

驚いたことがあったが、選択するためには心内知性という、自分を見つめる力がないといけません。自分が何をしたいのか、自分が選ぶのかということです。それに対して、意思を持たないと選択できません。選択したら、責任を取る力がないといけません。自分はこうしたいと伝える力、表現力。保育の中で必要な力に表現力があるが、

これは選択することでも、そういう力が付く。最後に実行機能。優先順位を考えるということです。物事は両立しないことがあります。その時に何を優先するか、そのために、こっちは我慢するということをしないといけないです。例えば、園の考え方ですけど、私の園の場合は、子どもたちが集団で給食を食べるメリットは、皆で揃うまで待つ、という力をつける。少し冷めますけど、どちらを優先するか。家では温かいものを食べられますが、園は、園でしかできないのは、温かいものを食べさせるよりも、みんなで楽しく食べることを私の園では優先しています。外からではなく、自分の中で判断する、優先順位を決めること。実行機能が注目されています。小学校へ行くと学力に影響するからだと言われています。例えば、お昼寝をするが、先生が読み聞かせをして、歌を歌って、おやすみなさいと言ったら、布団が敷いてある所へ自分から行きます。寝るところに連れていくのではなく、自分で行きます。私からすると、子ども集団があるからです。家で一人ではしません、皆がいるから行きます。看護学校で教えていた時に、ある学生がお昼寝と給食が嫌で、トラウマになって保育園時代が嫌だったという人がいた。でも大人になると、食べることに、寝ることが人生の楽しみのトップだった。何で保育園時代嫌だったか。それは寝させられ、食べさせられていたから。大人になると、食べるのも待ち遠し、寝るなら寝てしまう。園のお昼寝や、食事も自分で食べようとする気持ちにさせる。注意して出来る事ではない。給食のおやつもそうです。ある園で保護者講演を頼まれた。選択をさせる話をしたら、ある保育者が反対する人がいた。「子どもに選択なんて無理無理。3歳でもできない」といった。そんなことはありません。0歳の子に、くるくるチャイムのおもちゃとTVゲームを置いておいて選べないと思いませんか？と聞いたことがある。小さいうちから選べると言っていたが、この出来事を見た時に、今度は逆に、大きくなる方が選択できないことが分かってきました。何でかということ、大きくなると選択するときに色々な要素が入る。例えば、親や先生に忖度をする。お楽しみ会で何をやりますか？ということ、主役をやりたい人が増える。これは子どもがやりたい選択をしているのではなくて、親が選ばせたいと思っているのだろうなと思って、忖度している。大きくなりにつれて、選択にはいろいろな要素があります。なかなか選択できない、小さい時ほど、本当の自分の気持ちを選択できることが分かりました。TV番組で、ランドセルを何色にするかがあった。昔は、男の子は黒。女の子は、赤と決まっていたが、今はいろいろな色があります。ランドセル屋に行って、子どもに何色にする？と言って、買って帰る。親も子どもに選ばせた。ランドセルメーカーが何で、あの色にしたかを子どもに聞くと、ほとんどの子が、親がそれを心の中で臨んでいるからと言っていた。小さいながらに親を喜ばせたい気持ちがある。純粋に好き嫌いで選択できるのは小さいうち。小さいうちから選択をさせていかないと、自分の意志で決められなくなる。この時も選ばせたいということではなくて、もう一つ効果が分かった。これは午前中のおやつにジャム付きのパンを出したら、残す子が多かった。あるとき先生が気づいて、ジャムのせいかもしれないと思って、調理に、ジャムのついていないのも出してみたと試した。子どもについているのと、付いていないのを選ばせてみた。最初は選択ではなく、残菜が何のためかだったが、見事に1歳児がどっちにすると聞くと、即座に答えていましたね。これは大人になって、いつまでもメニューが決められない人がいる。こっちは美味しそうとか、あっちで食べている人を見て、あれがいいという人もいる。そしたらその結果、残菜が0ですね。最初の頃は、ジャムが付いていないパンを選ぶ子が多く、先についていないのがなくなりました。新人の若い男性が、どうしようか悩んでわからなくて、子どもに、「こっちのついてるパンにする？こっちにする？」と聞いたら、子どもは、どっちもついてると思いつながら、こっちを選んだら、食べた。選択する効果は、責任を取ることを思えるのだと思いました。小さいうちから選択をさせていくというので、実践発表会がこの間、金沢であったが、その中の発表の中に、0歳からすべて選択をさせている。手形を押す時に、何色にするとか、出来る場面を子どもに選択させていくと、上に行くと、忖度よりも、ちゃんと自分の意志で選択できるようになると言っていました。今度は、ビスケットのおやつの方に1枚にするか、2枚に

するか。そうするとこれはまず、数の理解と好き嫌いではなくて、どれくらい食べれるかが分からないと選択できない。迷う子がいて、2枚欲しいけど、食べれるかなという子がいる。隣の子が迷わないでこっちにしなと手渡した子がいて、1歳でもそうするんだと思うことがあった。サツマイモが大きいのか、小さいのか。まだまだ概念が分かっていなかったの、先生が大きさの概念を伝えて、どっちを食べたいかを選択した。これで分かったことが2つ大きな発見があった。ある子が小さい方を選びました。先生は分かっている、もう1回聞きました。先生は、その子にどっちが必要かを知って、選ばせていることが分かりました。ある子は悩んで選べなかった。3つ目の選択、お茶だけでいいということを察して、お茶だけをあげた。選択をさせるには、子ども自身は、自分を見つめる力もあるけれど、まだまだ正しい選択をできない時に、先生はその子のことを知っておかないといけない。その子に必要なことは何か。例えば、お昼寝は3歳以上は寝る、寝ないを選択できます。しかし、先生が寝る必要かあるかどうかを知っておかないと、ただ選択してではなくて、子どもに正しい選択させることを、順に教えていかないといけません。君はすぐ眠くなるよね、寝た方がいいんじゃない？と言って、選ばせていくことが必要です。選択は育てていかないといけない部分もあります。今の時期のプールも、朝来たら自分の写真を自分は何のチームに入るかを選択する。水が怖い人は、カニで入る。平気な人はイルカで入る。今は高いところにボードを置いています。それは、親子で来た時に、親に動かしてもらうために、どこに入るの？と親が聞いて、ここで入ると親子の会話をさせ、親に伝える、親に知ってもらおう意図があると言っていました。それからクリスマスの飾りを作るが、飾りを作るときにはさみを使うか、折り紙を折って、作るか計画します。はさみを使うなら、発達には順番があります。直線切りが切れば、直線の一回切り、連続切りが出来て、途中切りが出来て、曲線切りが出来てくるようになってきます。これまでは年長さんは難しいの、年少さんは、簡単ではなくて、その子の発達に合ったもの。簡単なのから難しいもの。345はこれまで3クラスありましたから、自分はどのようなを作らせるかを決めて、子どもにどれを作るか選ばせる。そうすると、自分で選んだ。ある時、まだはさみが使えないのに、難しいのを選んだ子がいました。選んだのだから頑張ってるって、ひとり言で、もうこんな選ぶのやめよと言っていた。ちゃんといいところを選ぶことを覚えていく。給食もセミバイキングという言い方は難しいが、まず一つは自分で好きな量を取っていく。私の園の場合は関わる力、表現力、人に伝える力もあるので、必ず当番に言って、よそってもらう。ホテルでは自分で取っていくが、子どもに量と言って、それに沿ってよそるといいう言い方をしています。よそったら食べきれないといけないということがあります。ここも実行機能ではないが、悩ましい優先順位があります。美味しそうかわからないものちょっと食べて、お代わりをします。明らかにおいしいものは、お代わりがありません。その時は先に多くとらないといけないので、子どもは悩ましいですね。選択をすると責任があるし、何を優先をするかを考えないといけません。

—選択—

場所も玩具も、全ての時間ではないが、0歳からどのおもちゃで遊ぶかを選ぶのが、0の環境です。欲張って二つ取ると、隣の子が取ろうとします。優先順位でこっち使うから、こっちあげる。伝い歩きが出来ようになった子は、上の棚、ハイハイの子は、下の棚に置いて自分で選ぶようにします。2歳になるとパズルをやるときに、どれをするかを自分で選ぶ。選ぶためには、ピースをはめて置いておかないとだめですね。違う入れ物に入れて置いてあるところがあると、まずなくなったピースが分かりません。子どもが選ぶためには、出来上がった図柄が分からないとだめ。やらせっぽい、自分で片して次のところへ行く。3歳になると今までの教室の考えではなくて、生活の場。子どもが主体的に活動する場、自発的な遊びをするために、保育室に色々なゾーンを置いて、子どもが選ぶ。選ぶときにただ、全体を使ってしまうと收拾がつかなくなったり、時間内に終わるか分からないので、開けるゾーンと閉め

るゾーンがあって、基本がどこでだれと遊ぶかは子どもが決める。これが子ども主体ということですね。ゾーンの開け閉めがある。時間帯によるが、朝の時間帯は子ども同士が話し合っ、どこを開けるかを決めます。お集まりの時に、自分たちで決めているので、さっと片付けています。制作ゾーンは自分で使いたい色鉛筆を持って行って、自分で使って元に戻す。実はそれがもっと徹底しているのがドイツ。まず飲み物は2種類以上出して子どもが選択します。うちの場合は、牛乳の時は、麦茶を出して選択できる。ドイツは全て2種類出します。給食室からピッチャーに持ってきて、子どもが自分で持てるピッチャーに移します。子どもは自分で飲みたい方をコップに入れるからです。ドイツは元から異年齢で、0~6まで異年齢クラスです。部屋の中に赤ちゃんもいます。赤ちゃんも自分で注ぎます。自分で入れられないので、ドイツの先生は子どもの手を取って注ぎます。あくまでも、自分で注いでいるように導きます。給食を食べる時の食器は、子どもが選びます。陶器でできているため重いです。小さい子は大きなお皿は持ってません。そうするとドイツ人ばいと思うが、小さいのしか持てない力なら、その大きさの容器でいいだろうと。これは比例すると思っていますね。自分で持つとかなり重いです。持って行って大きなお皿で給食が来ます。日本ほど豊富ではないが、パスタにトマトソース、チーズのせ。まず子どもたちはパスタをお皿によそります。園長は最初の頃は、お皿よりも床にパスタが大きかった、次第に机が多くなり、お皿の上が多くなりました。しかしこれが保育です。床に落とすからと怒ってはいは、保育はしていないといひます。小さい子はよそえない場合は、手を持ってよそってあげます。先生が代わりにしてあげることほしないです。パンと同じで、多くの子はパスタだけでした。トマトソースもチーズものせていない子が多かった。その時に日本人の質問は、栄養が足りるんですか？と聞くんです。向こうは栄養で食べさせるなら、家で食べればいいですよ。園では自分の意志で食べることを大事にしていました。私からすると、残すならもっと栄養が足りないじゃないかと思ひますね。パンだけなら足りないかもしれないが、ジャムが付いたら栄養が足りるか？残していたので、栄養が足りるために、残さないために口を入れたら不適切保育で、イヤイヤ食べていても栄養にならないです。これが私が考える、子ども主体の具体的なやり方です。どこを選択させるかということがあります。選択をもう一步進めた考え方が、「参画」という考え方です。

本稿は、2023年9月5日に開催した「第57回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)